

昼、男達は使役にかりたてられ、昼も夜も心配ばかり。

ハルビンの冬は寒く、だんだんと冬が間近になると一層心配の明け暮れ、食糧も男達の使役や、僅かな着物との交換。

月に何回か南下する人達もあるらしく、早く南下組になれないものか、それを望みにしての暮し。

後続の避難民が、ハルビンに到着するたびに肉親はと、迎えに出たが見当たらず、寒い冬も過ぎ、ようやくハルビンにも春が訪れる。

二十一年五月中旬、やっと南下組に組まれて列車に乗ることが出来た。

叔父叔母とは別れてもまた、会うことを望みつつ列車に乗って新京、奉天も過ぎ、終着地、撫順に着く。収容者は皆、駅で出迎えを受ける。

生きていて良かったと、お互いにただただ涙。

手を取り合って喜ぶ。

さすが撫順は暖かく、別れた叔父叔母達も早くこないかと、別れた人達の幸せを祈るばかり。撫順での生活は落ちついたが、二か月後内地送還のためコロ島に移動、

二十一年十月十日コロ島より博多港へ引揚。博多より故郷宮城県桃生郡河内町鹿又へ引揚げて、夫の復員を待つたのでした。

引揚者体験の記

北海道 吹田 シノブ

昭和十二年頃、招きによって東京の教員生活から大連満鉄に転職しました。

家族三人は大連の社宅に住むことになりました。昭和十七年頃北京へ単身赴任しました。

昭和十九年春に軍族として南方に行き私と娘は大連に残りました。そうして、昭和二十年の八月にあの終戦を知らされました。角の通りに面した我家で終戦後一週間もたった頃、大きな戦車が一列に山手の方へ次々と続いで行く。機関銃をかまえたソ連兵が、その間にちらりほらりと見えた。

女、子供は一步も外へ出ない方がよいだろう幾日もま

んじりともせずに着のみ着のまま、寝たことか、そしてどのようなものを食事してどうして生活したかは覚えていないが多分戦争中に買いきの米やその他の物で食いつなぎは出来たのか。

近所の男の方にたのんで何か買って来てもらったのか。そのときは無我夢中の毎日、リックサックに最小限必要なものをつめていつでも家を出られる用意をした。

その苦勞は、今なお忘れることはありません。不気味な恐ろしいことがあった中で私は日本人はお隣同志心を合せてお世話になり、またお世話をいたしました。食べることが第一大変な苦しみです。私は八月末急病のため生死をさ迷いまして、近くのお医者さんと、軍医さんに助けて頂きました。

食物ものどを通りませんでした。娘はまだ女学生でしたがまだ外出も出来ませんのでお金になるようなものを入にたのんで売り、食品を手に入れました。かんたんに書けることですが、そのありさまをご想像下さい。露天市場で、だまされて米が土であったりしたことが、あり

ました。

なお北満の方から追われて来た人のため同居生活をやむなくされたときは、私の家に、三世帯一緒でした。またその家を追われて、雑居に近い室に引越しということになりました。

引越しのたびに家の道具がなくなるのです。目をはなさないようにと思うのですがとてもそうはいきませんでした。

入浴のことですが、石炭はなしあったけの本や家具をなたでこわして焚いてお風呂に入りました。

神棚等はアパートの屋上で焼きアスファルトがとけて、あわてて水をかけたこと、そしてもえた灰が風もないの空へ空へと舞い上がりました。全員思わず手を合わせました。

まもなく引揚げの命令がありました。それは昭和二十二年の二月のこと。何時までにどこに集まれの一声で二時間くらいで集合。すっかり片付けきれないながらも整理をし、あとは次の方にお願いで手に持てるだけを持ち、二人は集合場所に足を運びました。北海道方面が一

陣引揚船宗谷です。途中船体故障で、海の真只中で十三日を過ごし、三月三日佐世保に着きました。お金は持たされませんでした。上陸のときには、一人千円を分配されました。

東京での汽車の乗りかえのときに偶然にも知合いの方に声をかけられ、いくらかお金をお借りして食品を買い、ようやく目的地小樽の実家に着きました。

女、子供の私共家族の終戦でのおそろしさ、そして不安。大連では満鉄の会社に貯えたお金、郵便局への貯金等、何の保障もありません。又家具其他の日用品、必要な物ばかりです。今はどうなっていることでしょうか。

夫、文明は南方の戦地から引揚後大病に二度もかかり、数年後また高校の先生にもどりました。六年間勤務の後死亡しました。昨年平成元年に二十三回忌を済ませました。

私は、職を得た娘に助けられながら今二人で人生を過ごしております。私八十六歳を迎えようとしております。娘は六十二歳になります。

遠く奥地から歩いて歩いて歩いて歩いてようやく帰り

ついた人。子供を中国人に預けて、そのままの人、途中で、子供の死に会って、着ていた着物の片袖だけを身代りとして持って帰った人の話を聞く。船の中で死んだ子を生きているかのように抱いて。水葬にされたらと必死だったあの母親、戦争でなくなった方は勿論だけれど後に残ってもっともっと苦しいつらい目に合った人達、こんな苦しみは、二度とあってはならないだろうけれど、体験した人達もかなりの年齢になり、戦争を知らない人達の時代となって来ました。

敗戦の満州脱出記

千葉県 松本 國忠

真夜中の突然の電話に起こされた。

局長からの電話である。

「おいソ連の飛行機らしいぞ。すぐみんなに招集かけろ。」

ただちに身仕度をして家内に言い含め局へ駆けつけ、